みんなで

のりこえよう通信

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　校長室から

令和　3　年　1月　28日　　NO.24

活字の力

緊急事態宣言が出て、休日の外出も思うようにいきません。

1月の最初には、京橋ツイン21で開催された大きな古本市にも行けませんでした。自粛したのです。振り返れば、例年楽しみにしている下賀茂神社で行われる真夏の古本市も開催が中止。毎年、参加していただけに残念でした。秋に京都の知恩寺で行われる古本市は、感染状況が改善されていた時期でもあり開催されたので、行ってきましたが、ここで楽しみにしていた古本のセリ市は、中止。数年前、調子に乗って横山光輝の漫画「三国志」デラックス版全60巻を600円で競り落とし小躍りして喜んだまでは良かったのですが、余りの本の量に持って帰ることができず自宅へ送ることに。その送料が千円‥‥。

そんな過去の出来事を懐かしく思い出しながら、休日は蟄居しています。

ひたすら本を読もうとするのですが、老眼に近視が邪魔をしてこれもなかなかままなりません。

ある南米の詩人の詩を調べたくって図書館に問い合わせると見つけてくれましたが、これが昭和30年に出版されたもの。表紙もペ－ジも赤茶けて、独特のホコリ臭い香りがします。しかし、古本ファンにとってこの匂いは最高。

ペ－ジをめくるごとに香しい薫りが。詩を読んでいるのか、匂いをかいでいるのかわからない始末。そっとページを手で触ると、紙の上に活字の凸凹が感じられて、昔は職人さんがひと文字ずつ活字で文章を作っていたことを改めて思い出しました。匂いと活字の触感と。

古いものには、デジタルにはないさまざまな味わいがあります。

ところで、その図書館で借りた詩集ですが、香りや風格も気に入ったのですが、中身も大変面白く、返そうとと思いながらも、返却期間が過ぎてもなかなか離れがたく、結局図書館から返却の催促電話が入って、渋々返却。

　同じような本は、ないかとスマホで調べると、見つかるんですね今どきは。ところが、古本市場(しじょう)では、定価以上の値段で取引されています。そんなに高くないので買えないことはないのですが、何となく悔しい。

　本ぐらい買いに出てもいいだろうと蟄居を破って近所の大型書店に。その詩集がありますかと聞くと、なんと広島支店にあるので取り寄せてくれることに。ついでに新刊本を検索できるアプリも紹介してもらって、欲しい本がすぐ手に入ることに。しかも、家に直接届いたりします。

　一瞬嬉しかったのですが、すぐに何となく不満。

　ぶらりと用事もないのに本屋へ行って、最初は本なんか買う気もなく、ぼお-っと書棚を眺めているうちに、「あれ、これ読んでみようかな」とつまみ上げた本との偶然の出会い。そこからはじまる自分自身の新しい領域の開発。そんな偶然の連続で紡がれる体験が、便利すぎると体験できなくなることに気づいたのです。

　しかし、本屋さんにとっては、大変な時代になりました。